

テストセットの類似度の操作による言語陰蔽効果の検討

北神 慎司・佐藤 弥・吉川左紀子

(京都大学大学院教育学研究科)

key words : verbal overshadowing effect , face recognition , verbalization

顔の記憶に対して、再認前の言語化が妨害的に働くことを言語陰蔽効果 (verbal overshadowing effect; e. g., Schooler & Engstler-Schooler, 1990) という (Finger & Pezdek(1999) が、「言語陰蔽効果の課題は、目撃者が犯人を見て、それに対する言語描写が求められ、そのあとで、ラインナップから犯人を同定するという、実際の目撃証言事態に非常に類似している」と指摘しているように、この効果を扱った研究は、目撃証言の実験心理学的検討という位置付けもある。

言語陰蔽効果に関する一連の研究 (レビューとして、北神, 2000) では、さまざまな実験変数を取り入れ、いくつかの理論的説明もなされており、その頑健性が一見示されているように思われるが、同効果の追認に失敗した研究も複数存在する。一方、一連の研究を概観すると、妨害効果が認められた研究のいずれにおいても、テストセットで使われた刺激サンプルが掲載されていないだけでなく、ディストラクターについては、「ターゲットと言語的に類似した顔 (verbally similar faces)」という記述のみしか見受けられない。

そこで、本研究では、テストセットの類似度の操作を行うことによって、言語陰蔽効果の再現性を検討することを第 1 の目的とする。また、第 2 の目的として、テストセットの類似度によって、顔の記憶に対する言語化の影響がどのように異なるかを検討する。

【方法】

デザインと被験者: 被験者数は 104 名。デザインは、テストセットの類似度(高/中/低) × 言語化(言語化/統制)の 2 要因計画で、両要因とも被験者間。実験用冊子による集団実験。

材料: 学習刺激 (ターゲット) として、モーフィングによって作成した男性 8 名の平均顔。ディストラクターは、8 名それぞれの顔と平均顔との合成変数を 3 段階に操作したもの。それぞれ 類似度・高条件は、「オリジナル 20% , 平均顔 80%」, 中条件は、「オリジナル 40% , 平均顔 60%」低条件は、「オリジナル 60% , 平均顔 40%」であった。

手続き: まず、学習時には、すべての被験者に、顔写真を 5 秒間提示した。なお、あとで、再認記憶テストがあることは予告しなかった (偶発学習)。次に、挿入課題が 5 分間行われた後で、半数の被験者は、5 分間で学習刺激の顔の特徴についてできるだけ記述し (言語化群)、残り半数の被験者は、関連のない課題 (都道府県名産出課題) を行った (統制群)。最後に、テスト時には、学習時に提示された顔写真 (ターゲット) と 8 枚の顔写真 (ディストラクター) のなかから、学習時に見た顔写真を選択する、強制選択式の再認テストが行われた。なお、ターゲットの位置は、カウンターバランスが行われており、ターゲットに組み合わせられるディストラクター (類似度・高、中、低の 3 種類) は、被験者によって異なっていた。また、再認判断に加えて、9 段階の確信度も併せて評定させた。

【結果】

再認テストにおける各条件の正再認率を図 1 に示す。² 分布を利用した分散分析 (逆正弦変換法) を行った結果、類似度の主効果が有意であり、類似度 × 言語化の交互作用が有意傾向であった。また、各条件における単純主効果検定の結果、類似度・高条件において、言語化の効果が有意であり (言

語化 > 統制)、統制条件において、類似度の効果が有意であった (多重比較: 高 < 中 < 低)。

次に、確信度得点について、再認判断が正答であった場合と誤答であった場合とに分けたうえで、類似度 × 言語化 × 解答 (正答/誤答) の 3 要因分散分析の結果、類似度および解答の主効果、類似度 × 解答の交互作用が有意であった。

【考察】

まず、再認判断について、類似度・低条件で、数値上は、「言語化 (66.7%) < 統制 (81.3%)」というように差がみられているものの、統計上有意ではなかったため、言語陰蔽効果はみられなかった。Schooler & Engstler-Schooler (1990) と同じように、再認判断と確信度判断を組み合わせた得点を元にした分析においても、言語陰蔽効果はみられなかった。しかしながら、この結果について、先行研究では、1 条件につき、40 名以上の被験者を用いているため (本研究では約 17 名)、被験者数を増やせば、統計上、有意な差が得られる可能性はある。

再認判断において、類似度 × 言語化の交互作用がみられたことは、統制群では、テストセットの類似度が高くなる (再認テストとして難しさが増す) につれて、正再認率が低下しているが、言語化群では、類似度に関わらず、再認成績は一定であったことを反映したものと考えられる。つまり、顔に対して、言語化は、その記憶を一定水準に保つ働きをもっており、視覚表象の形成に一定の機能的役割を果たしていると考えられる。それに対して、統制群は、テストセットの類似度によって操作された再認テストの困難度の影響を直接受けてしまう。したがって、言語化による顔の記憶への妨害効果 (=言語陰蔽効果) や促進効果 (本研究でみられたもの) は、結局のところ、統制群の解答可能性によって規定される、あくまで「相対的なもの」という可能性が考えられる。

最後に、確信度得点について、解答 (正答/誤答) の主効果がみられたことは、先行研究と一致した結果であった。また、類似度の効果は、類似度が高くなるにつれて、単純に再認判断の難易度も上昇することを反映した結果であろう。

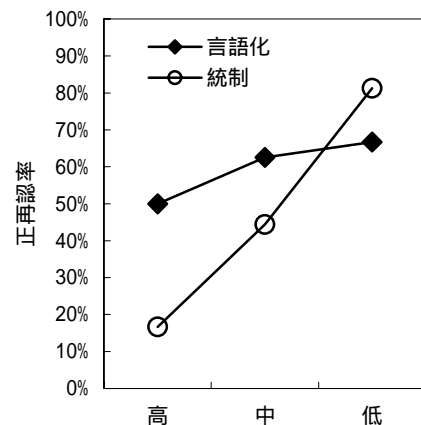


図1 各条件における正再認率